

3. 光化学オキシダント (Ox)

平成12年度の光化学オキシダントの有効測定局は、1,188局（一般局：1,158局、自排局：30局）であった。

このうち、環境基準達成局（昼間（5～20時）の1時間値の最高値が0.06ppm以下の測定局）は一般局と自排局を合わせて7局（0.6%）と、依然として低い水準となっている（図3-1）。

しかし、これを濃度別の測定時間の割合で見ると、1時間値が0.06ppm以下の割合は93.9%、0.06ppmを超え0.12ppm未満の割合は6.0%、0.12ppm以上の割合は0.1%となっており、ほとんどの測定時間において環境基準値以下であった（図3-2）。

また、大都市に限らず都市周辺部での光化学オキシダント濃度が0.12ppmを超える日数も多くなっており、光化学大気汚染の特徴である広域的な汚染傾向が認められる（図3-3）。

図3-1 光化学オキシダント（1時間値の最高値）レベル別測定局数の推移

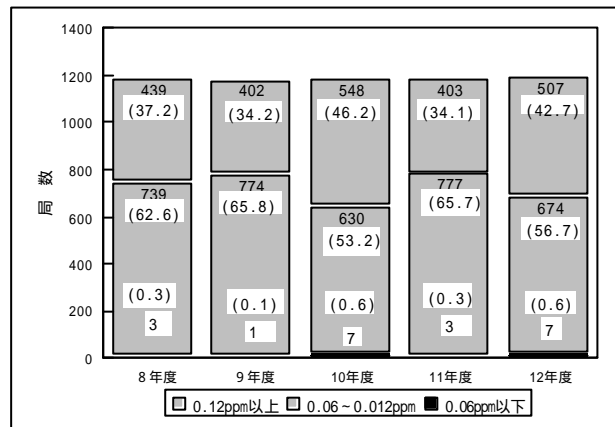


図3-2 光化学オキシダント濃度レベル別測定時間の推移（昼間）

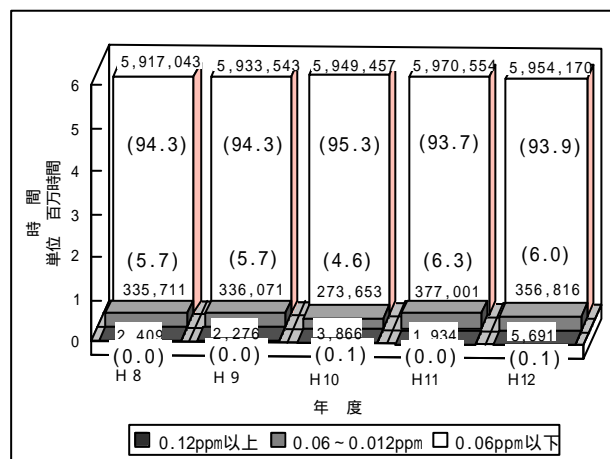
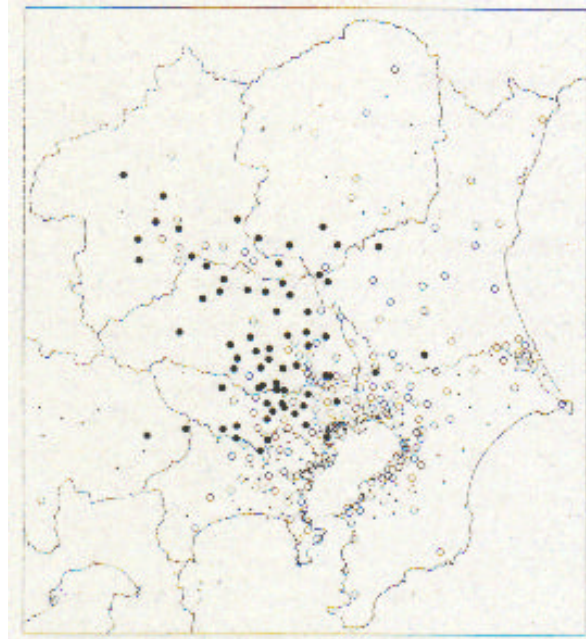


図3 - 3 注意報レベルの濃度が出現した日数の分布（関東地域、関西地域）

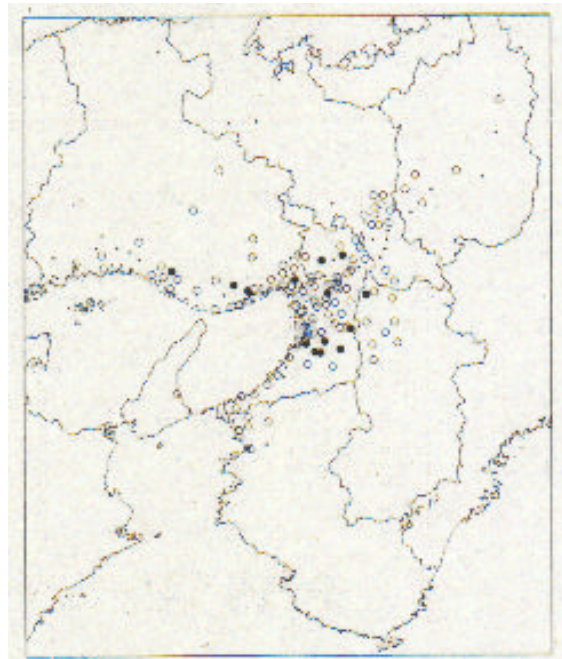
関東地域

- ：日数が10日以上の測定局
- ：日数が1～9日の範囲にある測定局
- ・：日数が無かった測定局



関西地域

- ：日数が10日以上の測定局
- ：日数が1～9日の範囲にある測定局
- ・：日数が無かった測定局



(参考) 非メタン炭化水素 (NMHC)

光化学オキシダントの原因物質の一つである非メタン炭化水素 (全炭化水素から光化学反応性を無視できるメタンを除いたもの) については、一般局では、午前6時～9時における年平均値は近年横這いからゆるやかな減少傾向を示しており、平成12年度 (351局) は0.24 ppmCであった (図3 - 4)。

また、自排局については午前6時～9時における年平均値は近年、減少傾向で推移しているものの、平成12年度 (177局) は0.35 ppmCであった。

大気環境指針：午前6時～9時の平均値が0.20～0.31 ppmC以下

図3 - 4 非メタン炭化水素濃度の推移

